

## 報 告

## 集団保育児の体調不良時の家庭での対応とその支援策について

長谷川 望<sup>1)</sup>, 大野 京子<sup>1)</sup>, 斎藤 義弘<sup>1)</sup>  
 浦島 充佳<sup>2)</sup>, 衛藤 義勝<sup>1)</sup>

## 〔論文要旨〕

免疫状態の未発達な乳幼児は集団保育開始により頻回の発熱などの感染症罹患を余儀なくされる。このような状況は慣れない環境に戸惑う乳幼児にとっては心身ともに多大な負担を強いている。保護者も「病気の時には自分で看病したい」という希望があるが、現状の看護休暇制度では保護者のニーズを満たさない点が指摘された。体調不良は入園後半年以内が一番多い。保育士は集団保育児の健康管理も担うことが期待される。小児科医の保健指導は積極的になされるべきである。

Key words : 集団保育・病児保育・看護休暇

## I. はじめに

女性の社会進出にともない、乳幼児を預けて働くことはより一般的になってきている。しかし免疫状態の未発達な乳幼児は、集団保育開始により頻回の発熱などの体調不良を余儀なくされる。このような状況は慣れない環境に戸惑う乳幼児にとっては心身ともに大きな負担を強いている。保護者にとっても職場復帰後間もない時期に看病のための休暇を頻回にとることは困難である。集団保育児の体調不良時対応の実情を把握し、保護者が求めている支援策を明らかにする目的でアンケート調査を施行したので報告する。

## II. 調査方法および対象

調査に先立ち、平成17年3月東京都内の一大学母子センターにて「集団保育児の園児間感染

症を防ぐために」と題した、フォーラムを実施した。保育士を中心とした150名余の出席者の中から、趣旨に賛同いただける施設を募りアンケート調査を施行した。アンケートは保育士向けと保護者向けに分けて施行し、それぞれ保育士合計194名中96名(回答率49.5%)、保護者合計652名中265名(回答率40.6%)より回答を得た。調査期間は2005年6月から7月であった。なおアンケート記載は無記名とし、個人情報としては一切使用しない旨を明らかにした。

## III. 結 果

## 1. 保育園園児の背景(図1)

保育園児の平均年齢31.6か月(最年少2か月, 最年長6歳1か月)男女比は134/129, 通園日数は1週間平均5.1日であり, 通園開始時期は6か月から1歳が43.5%と最多であった(図1)。通園開始時期に関しては現在所属以前

The Supportive System for Parents and Their Sick Children Who Usually Stay at  
 Childcare Center

[1832]

Nozomi HASEGAWA, Kyoko OONO, Yoshihiro SAITO, Mituyoshi URASHIMA, Yoshikatu ETO

受付 06. 6. 8

採用 07. 9. 23

1) 東京慈恵会医科大学小児科学講座(医師/小児科)

2) 東京慈恵会医科大学臨床研究開発室(医師)

別刷請求先: 長谷川望 東京慈恵会医科大学附属病院 〒105-8461 東京都港区西新橋3-25-8

Tel : 03-3433-1111 Fax : 03-3435-8665

年齢 平均 31.6か月（2か月～6歳1か月）  
 性別 男/女=134人/129人  
 通園日数 平均 5.1日/週  
 保育時間 平均 8.8時間/日  
 通園開始時期

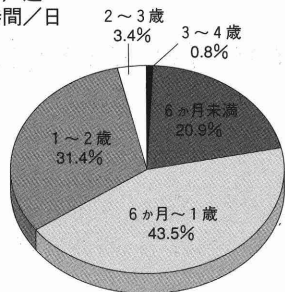


図1 保育児の背景

に集団保育を開始した場合はその月齢を記入することとした。また第1子は58.6%，第2子は31.3%，第3子は6.6%であった。保育時間は1日平均8.8時間±1.6時間であった。

父親の勤務状況は1週間に5.5日±0.7日，1日平均10.1時間±2.2時間，休日は1週間に1.6日±0.9日であり，母親の勤務状況は1週間に5.1日±0.7日，1日平均7.7時間±1.4時間，休日は1週間に2.0日±1.5日であった。

祖父母との同居はしているとした家庭は12.5%，していないとした家庭は87.1%であった。また祖父母宅までの距離を尋ねたところ30分以内が51.9%，1時間以内は13.2%，2時間以内は16.9%，それ以上としたものは17.7%であった。

送迎は主に母である，という回答は65.2%と最多であり，父親は8.3%，両親交代でとしたものは15.4%であった。

なお，基礎疾患の有無に関して質問したところ，「ない」は75.9%，「ある」は24.0%であった。疾患別としては気管支喘息19名，アトピー性皮膚炎13名，中耳炎5名，けいれん・神経性疾患は5名，先天性心疾患は2名であった。

2. 欠席状況 (図2)

保育園に入園してから体調不良のための欠席日数を質問したところ，

入園から半年以内：平均11.4日±11.4日 (最高90日)

入園半年から1年以内：平均9.9日±8.8日 (最高53日)

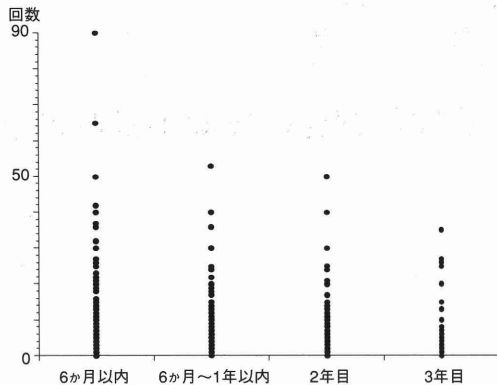


図2 保育園に最初に入園してから体調不良のために何回くらい欠席しましたか

入園から2年目：平均7.5日±8.2日 (最高50日)

入園から3年目以降：平均5.8日±7.2日 (最高35日)

という結果であった。

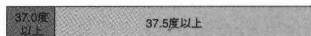
3. 体調不良時の家庭の対応

<家庭での欠席の判断> (図3)

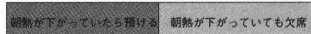
保育園を欠席させる目安を尋ねた。

- ① 発熱の欠席の目安にしている体温は37.0度以上が10.9%，37.5度以上が89.1%であった。
- ② 前日に38.0度以上の発熱があったときどのように判断するかは，朝熱が下がっていたら預けるは53.4%，下がっていても欠席させるは40.6%であった。
- ③ その他の欠席の理由となるものとしては下痢が54.1%，せきや鼻水があるは13.3%，いつもに比べて元気がない，または食欲がない

欠席の目安にしている体温は？



前日に38度以上の発熱があったときにはどのように判断しますか



欠席の理由とする体調不良は？

下痢をしている，咳や鼻水がある，いつもに比べて元気または食欲がない，発疹がある，腹痛，頭痛，その他

欠席したほうがいいのか判断に困る場合はどのようにしますか？

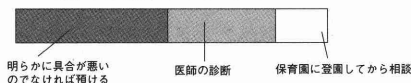


図3 保護者の欠席判断目安

は13.3%, 発疹があるは16.1%, 腹痛または頭痛などは2.8%, という結果であった。

- ④「欠席したほうがいいのか判断に困るときにはどのようにしますか」という質問には, 明らかに具合が悪くなければ預けるが56.2%, 医療機関を受診して医師の判断に委ねるは28.3%, 保育園に登園してから相談するは14.7%であった。

<体調不良時の家庭での対応> (図4)

- ①「熱などの連絡があったとき誰が迎えに行くか」という質問には, 母が32.6%, 父は8.2%, 同居祖父が2.0%, 同居祖母が6.1%, 非同居祖父が4.1%, 非同居祖母が42.9%, ベビーシッターが2.0%, その他は2.0%, という結果であった。
- ②「子どもが病気などで急に保育園に預けられなくなったとき休暇はとれますか」という質問には, 休暇はいつでもとれるが11.9%, 比較的とれるは63.1%, 困難であるが25%という結果であった。
- ③ 祖父母との同居はしているとした家庭は12.5%, していないとした家庭は87.1%で

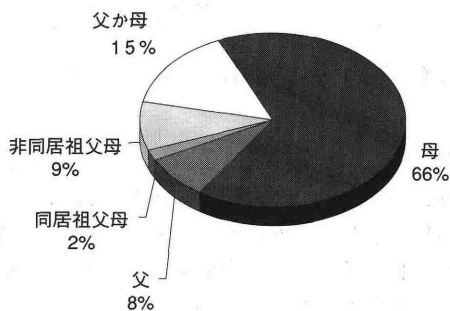
あった。また祖父母宅までの距離を尋ねたところ30分以内が51.9%, 1時間以内は13.2%, 2時間以内は16.9%, それ以上としたものは17.7%であった。

- ④「お子さんが病気で保育園に預けられないときどなたが看病しますか」の質問に対しては, 母が32.6%, 父は8.2%, 同居祖父が2.0%, 同居祖母が6.1%, 非同居祖父が4.1%, 非同居祖母が42.9%, ベビーシッターが2.0%, その他は2.0%, という結果であった。

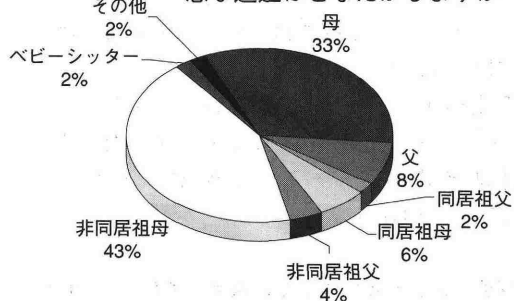
4. 園児の体調不良に対する保護者の意識 (図5)

- ①「保護者の勤務状況によっては多少子どもに無理をさせていると感じても預けることがあるか」の質問に対しては「ある」は32.4%, 「ときにある」は56.8%, 「全くない」は10.4%であった。
- ②「保育園に入所したら風邪などひきやすくなるのは仕方ないと思いますか」という質問をしたところ, 「仕方がない」は92.9%, 「仕方がないと思わない」は6.8%, 「その他」は0.3%であった。

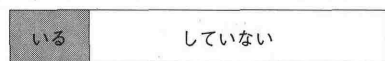
普段、送迎はどなたがしますか



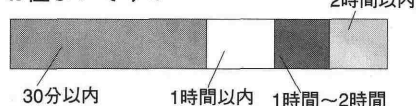
急な送迎はどなたがしますか



祖父母と同居していますか



祖父母は自宅からどのくらいの距離にお住まいですか



子どもが病気などで急に保育園に預けられなくなったとき休暇はとれますか

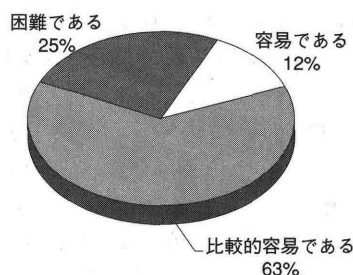


図4 通常の送迎と体調不良時の対応

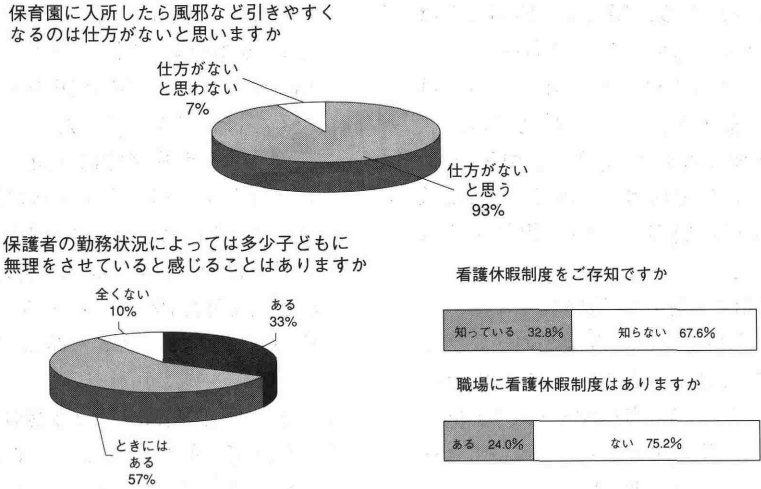


図5 園児の体調不良に関わる保護者の意識

- ③ 「保育園に預けている子どもの体調が悪くなることで困難を感じたことはありますか」という質問には、「核家族なので保育園に預かってもらえないと預けるところがない」、「仕事を休むと勤務先での評価が低くなる」、「頻回の体調不良が負担になりかわいそう」、「職場に連絡をもらってもすぐには迎えにいけない」、「勤務のため病院に受診させるのが難しい」、「保育中には薬を飲ませてもらえないので困る」などという回答があった。
- ④ 看護休暇については、「知っている」は32.8%、「知らない」は67.2%であった。看護休暇が職場に「ある」は24.8%、「ない」は75.2%であった。

5. 園児の体調不良に際しての保育士の意識と対応 (図6)

- ① 入所後しばらくは感染症にかかりやすいという印象があるか?という質問には「ある」は64.0%、「ない」が28.0%であった。またかかりやすいという印象をもつのは入所後何か月かという質問に対しては、初めの1~3か月間が43.6%で一番多かった。半年以内としたものは18.0%、1年以内としたものは5.4%であった。
- ② かかりやすいという印象があるのはどのような子どもか、という質問には、保育時間が長い子ども、という回答が最も多く、

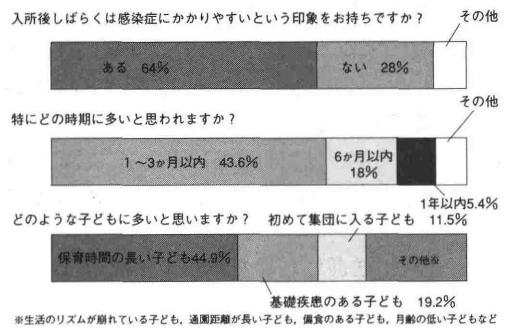


図6 園児の体調不良に際しての保育士の意識

- 44.9%であった。次に基礎疾患のある子ども19.2%、初めて集団に入る子ども11.5%、その他生活リズムが崩れている子ども、通園距離が長い子ども、偏食のある子ども、月齢の低い子ども、をあげていた。
- ③ 「園児の体調が悪くなることで困難を感じたことはありますか」という質問 (複数回答可) には、保護者が迎えに来られないため体調不良の子どもを保育園で預からなくてはならないが33.1%、治療していないのに無理をして出席したため感染症が流行してしまったが29.7%、子どもが受診した医師によって保育園に出席してよいかの判断が異なるが31.4%、薬を飲ませてほしいと頼まれるが規則でできないが2.3%、応急処置がわからないが5.7%という結果であった。この他欠席

するほどではないが、体調不良の子どもも人員の都合により健康な子どもと同じ活動をせざるを得ない、仕事を休めないという保護者の事情は理解できるが、体調不良時に無理に預けられるのは子どもがかわいそうだと思う、などの意見があった。

- ④「保育園内で感染症の流行があり、その対処に苦慮した事例があるか」という質問には、嘔吐下痢症が十分に回復していない時期に登園し感染が流行した、嘔吐下痢症の発症時に吐ぶつ、便などの処置が不十分だったため園児、職員に感染が拡大した、感染拡大を防ぐことができずいろいろ検討した結果、職員の手洗い後の共用タオルをペーパータオルに変更してようやく拡大の終焉をみた、などの事例があった。
- ⑤ 早期発見に自信のある疾患を尋ねたところ自信があるとしたものの割合は、以下のような結果であった。

麻疹7.2%、風疹8.2%、おたふく46.4%、水痘53.6%、手足口病63.9%、ヘルパンギーナ6.9%、プール熱（咽頭結膜炎）3.1%、伝染性紅斑（りんご病）24.7%、伝染性膿痂疹（とびひ）、溶連菌感染症2.1%、突発性発疹16.5%、インフルエンザ3.1%、アタマジラミ19.6%、流行性嘔吐症21.6%。

#### 6. 保護者の求める体調不良時の支援のありかた

アンケートでは、

- ・保護者が自分で看病しやすいような看護休暇
- ・小児科医院内の病児保育室
- ・総合病院内の病児保育
- ・病後児保育室
- ・病気の時に緊急でも自宅に来てくれるシッターサービス
- ・その他（具体的に）

という項目の中から利用したい順に数字を記入してください、という形式で質問し、それぞれ優先順位1位に選んだ場合5点、2位4点、3位3点、2位2点、5位1点とスコアリングし合計点で比較した。

この結果、看護休暇774点、小児科医院内の病児保育773点、病院内病児保育566点、病後児

保育417点、緊急シッターサービス71点であった。

ちなみに最も利用したい支援として、看護休暇を選択したものは52.1%で小児科医院内の病児保育室24.1%、病後児保育10.3%、緊急シッターサービス6.0%、総合病院内の病児保育3.9%の順であった。

その他の意見として有給をとりやすい職場環境、病気のと看のみ全く違う環境に連れて行くのは児に負担なので、通園している保育園で病後児保育をして欲しい、シッターサービスを利用したいが料金が安い、看護資格をもったシッター、保育園内に医療者が常在して病児保育をしてくれると良い、病気のと看くらい親と一緒にいてやりたいが子どもが複数いても看護休暇は母一人分なので十分でない、病後児保育を保健適応して欲しい、などの意見があった。

#### IV. 考 察

女性の社会進出に伴い、乳幼児を預けて働くことが一般的になってきている。しかし乳幼児は免疫学的に未発達なために集団保育の場では感染症罹患の機会もより多くなり、「病気になった子どもを誰が看病するのか」と児の体調不良時の対処については苦慮する背景がある。

アンケート調査の結果から保育士からみた保育現場が求める支援、また保護者が求める支援について考察する。

まず、保護者アンケートからは、集団保育開始後の児の頻回の体調不良に、仕事と子育ての両立に困難を感じている現状が浮き彫りになった。例えば児が前日に38℃以上の発熱を認めた場合には当日の朝解熱していても欠席させることが望ましいと考えられるが、実際には解熱さえしていれば半数以上が預ける、としていることなど、児に多少無理をさせている、とほぼ90%の保護者が感じている。アンケート結果からは祖父母との同居などで児を預けやすい環境では体調不良時は無理させず自宅で休養するなどの対処ができるということが推察された。

保護者も実際「病気ときは自分で児の看病をしてあげたい」と願っている。今後一層の看護休暇の充実が望まれる。十分に治癒してから登園することは感染拡大防止にもつながる。

近年病児または病後児保育も整備されてきたが、保護者は普段通園する保育園内、または小児科医院併設の病児保育室を希望する声も多く、多様化が求められている<sup>1)2)</sup>。

乳幼児を預かる保育の現場では、保育士も児の頻回の体調不良に困難を感じている。

感染症の流行を防ぐためにも、体調不良時にはなるべく休養をとるべきであると理解しつつも保護者の立場を慮り、ある意味板挟みになっている。

保育士からの回答として注目すべきは体調不良を来し易い児は、保育時間が長い、生活リズムが乱れている子どもであるとの指摘である。家庭での健康管理は大切であり、健康管理の留意点など啓蒙が必要であろう。

保育士は今後健康管理を担うことも期待されると考える。小児科医として保護者、施設関係者への保健指導は積極的になされるべきである<sup>3)</sup>。

保護者、保育士の双方の回答から、体調不良は入園半年以内が多いことが明らかになった。保護者は時として「このままでは仕事が続けられないのではないか」と悲観し、ストレスも大きい<sup>4)</sup>が、この情報を提供することで保護者の心情の負担が軽減し、職場での理解も得やすくなるのではないかと。

今回の調査では、保育士、保護者からのアンケート形式で施行した。今後は保育の現場で、欠席日数、その理由、園児の背景など感染症罹

患の頻度を増大させる因子を明らかにしていきたい。

合計特殊出生率は1.29と過去最低を更新して<sup>5)</sup>、少子化対策は正に危急の課題である。子育て家庭の求めるものは必ずしも制度ではなく子育てを暖かく見守る社会そのものであろう。

#### 謝 辞

アンケート調査にご協力いただいた各保育園保育士、保護者の皆様に深謝いたします。

なお本論文の要旨は第11回日本保育園保健学会にて発表した。

#### 参 考 文 献

- 1) 中川さとの, 桂 敏樹. 病児保育に関する現状と課題—保護者を対象としたアンケート調査. 小児保健研究. 2004; 63: 389-394.
- 2) 谷本弘子, 谷本 要. 病児保育の必要性と課題—保護者へのアンケート調査より. 小児保健研究. 2006; 65: 593-599.
- 3) 松平隆光. 集団生活における急性感染症への対応. 小児科臨床. 2005; 58: 653-659.
- 4) 平岡康子, 松浦和代, 野村紀子. 乳幼児をもつ就労女性の育児ストレスと職業ストレスの分析. 小児保健研究. 2004; 63: 647-652.
- 5) 坂東里江子. 主要国女子の年齢別出生率および合計特殊出生率: 『人口問題研究』国立社会保障・人口問題研究所 2002; 58: 75-80.